

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 5 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K01993

研究課題名(和文) 共同行為の虚構論的および演技論的分析 義務の発生の問題に即して

研究課題名(英文) An analysis of joint action in terms of fictionalism and with regard to the emergence of obligation

研究代表者

田村 均 (Tamura, Hitoshi)

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：40188438

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)： ジョン・ロックのキリスト教的自然法思想とデイヴィッド・ヒュームの非キリスト教的道徳思想とを比較検討し、ヒュームの間接情念の理論の重要性を指摘し、かつ、ヒュームは自由の基礎づけのために宇宙的知性を認めた可能性があるとして指摘した。  
虚構論のための基礎作業としてKendall Walton, *Mimesis as Make-Believe*を訳出し、ケンダル・ウォルトン『フィクションとは何か』として刊行した。  
研究内容を総括する『自己犠牲とは何か 哲学的探究』(仮題)という著作の草稿を完成した。2018年度中に刊行予定である。

研究成果の概要(英文)： I made a comparative study of the conceptions of morality in Locke's Christian ethics and Hume's non-Christian ones. I pointed out the significance of Hume's account of indirect passions as an analytic explication of moral feelings in a non-Christian way. But I also suggested that at the end of *Dialogues concerning Natural Religion* Hume might have been theoretically necessitated to accept the conception of a cosmic intelligent being, something like God, as the foundation for human natural freedom from the present political power structures.

I translated Kendall Walton's *Mimesis as Make-Believe* into Japanese, and published it in 2016. This is to be considered as a basis for the fictionalist concept of moral obligation.

I have completed a book-length study, *What is Self-Sacrifice: a philosophical investigation*. I am going to publish it in 2018.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：自己犠牲 キリスト教 倫理学 ジョン・ロック デイヴィッド・ヒューム 社会哲学 虚構 演技

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 人間の社会性の考察は、アリストテレス以来、政治哲学、社会哲学の分野で途絶えることなく続けられている。西洋中世および近代においては、そこにキリスト教的自然法思想が強力な枠組みを提供した。西洋近代思想においては、神と個人と自然が正しく認識されれば、個人の理性によって共同的な生活組織、つまり文明的な社会が構成できる、という直観が支配的となる。その一典型はジョン・ロックの政治哲学である。

本研究は、しかし、この近代自然法思想を根本的に批判したデイヴィッド・ヒュームに範を取る。ヒュームは『人間本性論』第2巻の情念論と第3巻の道徳論を通じ、神の命令を想定せずに人間の相互作用から自然成長的に構築される人為的徳 (artificial virtue) の理論を構築した。本研究は、デイヴィッド・ヒュームからチャールズ・ダーウィンを経て現代に到る人間の社会性の自然主義的な分析を、特に、現在一部の論者たちによって活発に議論されている共同行為論 (theories of joint action) 及び虚構論 (fictionalism) に着目して遂行しようとするものである。

(2) 共同行為論に関わる海外における近年の代表的研究者としては、マーガレット・ギルバート (Margaret Gilbert)、マイケル・ブラットマン (Michael Bratman)、ライモ・トゥオメラ (Raimo Tuomela)、アブラハム・セッシュー・ロス (Aberaham Sesshu Roth) らが挙げられる。この中では、ギルバートとブラットマンの理論的な対立が、本研究課題に最も深い関係を持っている。ギルバートは、大著 *On Social Facts* (1989) 及び論文集 *Living Together* (1996)、*Sociality and Responsibility* (2000) 所収の諸論文において、共同行為の主体は彼女が複数型主体 (a plural subject) と名付けた多人数の意志の連合体であって、これは個人には還元できず、個人に対する義務 (obligation) の源泉として機能する、と主張した。これに対しブラットマンは、論文集 *Faces of Intention* (1999) 所収の論文等において反論した。この論争は、近年まで続けられ、共同行為と義務の問題を検討する共通基盤を形成している。

(3) 中山康雄 (大阪大学) の『共同性の現代哲学』(2004) 及び『規範とゲーム』(2011) は、共同行為に関する重要な先行研究である。とりわけ中山 2004 は、共同行為論を言語行為論と見通しよく結び付けるすぐれた業績である。

また、柏端達也 (慶應義塾大学) が『自己欺瞞と自己犠牲』(2007) で展開した行為の共同性の判別基準と、その自己犠牲的行為への適用は、身体動作の発動者としての個体の中に共同意図が組み込まれる過程のすぐれた分析となっている。

### 2. 研究の目的

(1) 共同行為 (joint action) が産出される過程を、共同行為の諸理論の検討を通じて考察し、共同行為の演技論的、ないしごっこ遊び的な説明枠組み (虚構論的説明) を構成する。

(2 a) 共同行為の演技論的・ごっこ遊びの説明の枠組み (虚構論的説明) を用いて、個々の行為者の個人意志に背馳する行為が、共同的な行為として生み出され得る構造を解明する。

(2 b) 個人意志に背馳する共同行為の成立を権力の作用として捉え、権力に演技的に服従する心的機制を、義務の心理の根底として解釈する。

### 3. 研究の方法

(1) 研究開始当初の背景の (1) に記したとおり、人間の社会性と義務の発生をめぐる本研究課題は、西洋思想史の根底にある神と人間の関係にかかわっている。それゆえ、西洋思想史をキリスト教神学と結びつけて再検討する必要がある。

(2) 研究開始当初の背景の (2)(3) に記したとおり、本研究課題は国内外の共同行為論の論点を踏まえる必要がある。

(3) 研究目的 (1)(2 a)(2 b) に記したとおり、本研究課題は虚構的な設定の下での人間の振る舞いの分析を徹底的に行う必要がある。

上記 (1)(2)(3) の必要を満たすため、関連文献を精査すると同時に、特に (3) については自説を立て、詳論する。

### 4. 研究成果

(1) 学会発表の、及び雑誌論文の、それぞれ第1部において、西洋思想史のなかのキリスト教思想の位置づけを、自然法思想と愛の概念を中心にして行なった。

自然法思想について、以下のことが見出された。

(a) 神は自らの意志によって世界を創造し、世界に対して外在的かつ超越的な位置をとって世界全体に命令を与える。

(b) 神の意志 (命令) は自然の中に顕わに示されている。

(c) 神の命令は法である。

(d) 非理性的存在 (事物) に対する神の命令が自然法則である。

(e) 理性的存在 (人間) に対する神の命令が道徳的自然法である。

(f) 道徳的自然法は ( ) 自己保存、( ) 次世代の再生産と育成、( ) 社会の形成の三つを基本とする。

(g) 自然法は国家の実定法に優越する。

(h) 世界には始まり(天地創造)だけでなく終りもある。終りは、人間の行為に対する法判断(判決)としての最後の審判である。

愛の概念については、以下のことが見出された。

- (a) イエスの十字架上の死は、人間に対する神の愛であると言われる。その所以は、アダムの墮罪以来全人類は罪の手に落ちているが、イエスが自らの生命を身代わりとして差し出すことによって、罪の手から全人類を解放する、という古代的な供犠として解釈され得る。
- (b) 神を愛し汝の隣人を愛すべし、という愛の教えは、神イエスの自発的で報償を求めない愛(自己犠牲)を範型とする。すなわち、まったく自発的に神と隣人とを愛する、という自由(自発性)の要請となる。
- (c) 神を愛することは神に従い、神の意志(命令)を実行することである。これは何らかの報償を求めて神と取引することではなく、まったく自発的に自由に無償で行われる服従である。
- (d) 愛の教えには、《自由かつ自発的であるような服従》という矛盾が含まれている。

以上の発見は、キリスト教思想においては常識に類するが、愛の教えに含まれる《自由な服従》という人間の自発性の矛盾した様相は、義務を考察するとき重要な手がかりとなる。

(2) 学会発表の、および雑誌論文のの、それぞれ第2部と第3部において、現代の共同行為論の背景を成す洞察を与えたデイヴィッド・ヒュームの慣習的合意(convention)の理論を検討し、これが共感(sympathy)と組み合わせることによって、或る人物に対する共同の道徳的評価(当該人物が善または悪であるとする判断)が形成されることを確認した。

キリスト教的自然法道徳は、ジョン・ロックにおいて典型的なように、神の命令である自然法に人間が理性の働きを通じて自発的に従う、という構造をもつ。上位者が命令し、下位者がその命令に自発的に従って与えられた役割を果たす、という形式をとる点で、この道徳的思考および行為の成り立ちは、共同行為の側面をもつ。伝統的なキリスト教道徳においては、人間の道徳的行為は神との共同行為となる。

デイヴィッド・ヒュームは、キリスト教的自然法道徳の批判者である。ヒュームは、慣習的合意と共感とが重なって作用することにより、神とは無関係に、所有権の尊重、約束の遵守、統治への忠誠、という社会形成のための枢要な美德が人為的に確立可能である

と論じた。そこで用いられているのは、人間のほぼ生物学的な自然本性としての自己利益への執着、身内優遇の傾向、他者への共感能力という三つと、社会生活を通じた慣習的合意形成という一種のゲーム理論的なメカニズムであって、神的意志といったものはまったく関係が無い。ヒュームの道徳哲学においては、神との共同行為ではなく、人間相互の共同行為として道徳の成り立ちが説明されることになった。

以上の考察は、道徳的な行為が、本質的に共同行為であるとする点に大きな特徴がある。これは、管見の及ぶ限り、明示的な断定としては国内外に例を見ず、相当に独自の見解であると思料する。道徳的な規範に沿って遂行され、評価される行為(=道徳的行為)とは、命令への服従や合意の形成によって個人意図を越える共同意図が形成され、共同意図の設定に沿って各人が期待される役割を遂行するという行為類型(=共同行為)とならざるをえないのである。道徳規範とは、社会の成員に共有される一種の共同意図にはかならない。

(3) 論文の、および図書のにおいて、虚構論の基本的な構造を確立した。

図書は、分析美学のエポックメイキングな大著の翻訳であるが、末尾に付した解説において、虚構的な設定の下で行うという行為が、人間にとって極めて本質的な行動様式であることを確認した。

ケンダル・ウォルトンによれば、芸術作品の鑑賞とは、子供たちがおもちゃを使って行なうごっこ遊びと同じ活動である。ごっこ遊びの中で、子供たちは日常とは異なる世界を作り上げ、その世界を他人と共有しながら他人がそれを別の視点から体験していることを発見し、それまでの自分とは違う自分を生きるやり方を学ぶ。ごっこ遊びは発達上重要な意味をもっており、さまざまなおもちゃは非日常の世界への橋渡しを担う特別な役割をその中で果たしている。表象体とは、これらのおもちゃのように、想像の世界への橋渡しを担う働きをもつ物体や出来事であり、ごっこ遊びの小道具となる機能を社会的に認定された事物なのである。

芸術作品の鑑賞は、ごっこ遊びに酷似している。例えば、『モナリザ』を見て「この笑顔、気味悪いね」と言うとき、私たちは、ある人物の気味の悪い微笑をそこに見ている。だが、現実には絵の具の塗られた画布があるだけである。現実において画布上の絵の具の染みを見ることが、虚構において微笑んでいる人物を見ることに、想像の働きによって変貌する。これは、現実においてお人形を抱くことが、虚構において赤ちゃんを抱っこすることに変貌するごっこ遊びの想像活動と、確かによく似ている。そして、お人形が遊びの小道具であるならば、『モナリザ』という作

品も芸術鑑賞という遊びの小道具と見なされてよい。芸術の鑑賞体験は、作品を小道具としたごっこ遊びなのである。こうして、ごっこ遊びとの共通性に着目することで、絵画も小説も映画も演劇も音楽も等しく見渡す視点が得られる。

人々は、街中で携帯電話や化粧品のコマースシャルフォトを見て、商品の画像と添えられたコピーから、その商品によって得られるであろう想像上の自分の生活を瞬時に思い描く。こういう想像から現実世界での行動がもたらされることもまれではない。人はコマースシャルフォトを論評したり、商品を購入したりする。人間はごく普通に虚構と現実をまたいで生きているのである。

このように、人間は、身の回りの物体や出来事を別の何かに見たてたり、何かをそこに読み込んだりする働きを通じて、いろいろな虚構世界をみずから想像する。そして、ほとんど無意識的に、さまざまな物語の中で考えて行動している。

こうして、画像、映像、音楽、物語などに感応し、虚構的に設定される環境のなかで行動することは、人類にとってごく当たり前の行動類型であることが浮かび上がる。

論文の においては、上記の虚構論の大枠を前提した上で、従来の美学理論とは異なる局面がウォルトンの芸術即ごっこ遊びの論によって拓かれることを指摘した。

ウォルトンの表象芸術論は、全体として、私たちが、表象体からもたらされる想像活動の命令に応じて、どのようにしてごっこ遊びを展開するか、という問いをめぐって展開されている。想像論的・行為的な関心がその中心にあり、想像活動の object (想像活動の依り代となる物体) はそこで重要な役割を果たす。表象体ないし小道具は、私たちに一定の想像活動を命令する。ウォルトンの言う想像活動の object は、それらの命令を具体化するときに、想像活動を生き生きとさせる実体性を供給して想像活動を支える。

想像活動の object のうちで重要なものは、想像する者自身である。すべての想像活動に自分についての想像がともなっており、その最小限のかたちは「どんなものを想像している」と、そのものについて自分が気づいていると想像していること」である。自分についての想像は、典型的には「自分が何かをしているところを想像するとか、経験しているところを想像する」という内側からの想像として実現され、想像する者をごっこ遊びの世界の行為者に仕立てる。

現実世界の自分が、虚構世界においても同じく自分でありながら、そのままナポレオンとなったり、スーパーマンとなったりすることができる。これは、現実世界の俳優がそのまま虚構世界のハムレットであり、現実世界の人形がそのまま虚構世界の赤ちゃんであるのと同じである。この「そのまま」の内実

は、現実世界の事物(想像活動の object)が、現実と虚構という二つの世界を跨いで同じそのそれとして指示される、ということである。こうして「現実の、中身の詰まった、蹴飛ばすことができる」物体が、私たちの想像上の世界に供給される。想像の内容は具体性を増し、おのずと湧く感情と相まって、私たちの虚構世界における行為、すなわち、ごっこ遊びは豊かで生き生きとしたものとなるのである。

以上の虚構論は、道徳論と重ね合わせることができる。この重ね合わせは、管見の及ぶ限り、試みとして国内外に例を見ず、まったく独自の見解である。ウォルトン的な虚構論は、表象的な芸術作品が、一定の想像活動を行うことを鑑賞者に《命令》する、という洞察が基礎となっている。鑑賞者である我々は、その命令にそのまま従ったり、少しヒネリを加えたり、あるいは一部を無視したりしながら、概ねその命令を生かす形で芸術作品にもとづく想像を展開し、その想像世界のなかで行為する。例えば、映画を観て恐怖を感じたり、小説を読んで涙を流したりする。

この芸術鑑賞の成り立ちは、先述の、共同行為としての道徳的行為の成り立ちと、構造的に一致している。両者とも、はじめに一つの命令があり、その命令に沿って個人が自分に期待される役割を遂行する、という共同行為としての形式をもつのである。

(4) 研究の方法の(3)に記したとおり、虚構的な設定の下での人間の振る舞いの分析については、自説を立てて詳述する必要がある。については、平成29年(2017年)10月初旬には40万字を超える原稿を完成させた。その後、平成30年度(2018年度)の科学研究費助成事業・研究成果公開促進費の公募に応募し、平成30年4月に同費目の交付決定を受け、現在刊行準備中である。平成30年秋には、本研究課題の研究結果が、『自己犠牲とは何か 哲学的考察』との表題の下、名古屋大学出版会から刊行される予定である。以下、本書について内容を概観しておく。

本書は、自己犠牲(self-sacrifice)という行為類型を通じて、人間社会の個人と共同体のかかわりを哲学的・人類学的に考察する試みである。犠牲と自己犠牲は、先史時代の狩猟儀礼に遡りうる人類の極めて古い行為類型である。だが、その哲学的な分析はほとんど見られない。その理由は、西洋近代哲学と自己犠牲とが概念的に両立し難いためである。

近代哲学は、個人が自己の最善を追求することを通じて社会全体の善が達成される、という個人主義を基調とする。これに対し、自己犠牲は、個人が自己の最善を断念することを通じて社会全体の善が達成される、という思想に基づく。この二つは両立しない。それ

ゆえ自己犠牲は現実に生じているのに、哲学的には無視されてきた。本書は、自己犠牲を対象として近代哲学の枠を超える考察を試みる。

本書の第 部は、第二次世界大戦後の戦犯裁判における日本人刑死者の遺文を取り上げる。彼らの遺文には「自分は新しい日本のためのいけにえである」といった文言がしばしば現れる。この遺文の思想と連合軍の裁判思想のずれを確認し、西洋近代の哲学的概念枠と自己犠牲の概念との不一致を明確にする。

ここにおいて特に参照されるのは、いけにえ譚および犠牲的行為が、本質的に演技性ないし虚構性を備えているという洞察である。すなわち、自己犠牲とは、ほんとうは死にたくないけれど、状況の要請によってやむを得ずして死を選ぶ行為を言う。ここには、共同体の意向(状況の要請)によって行為者の本意が否定されながら、ほんとうは生きのびたかったという本意のゆえに、死が意味をもつ、という矛盾した様相がある。この、現実(生きのびたかった)と虚構(皆のために死にます)の矛盾が、行為の演技性、虚構性として現れる、という構造がある。

第 部は、自己犠牲的行為の論理的構造を分析する。現代アメリカの社会心理学的調査やギリシア悲劇の研究など、哲学分野以外の成果を援用しながら、分析哲学の手法によって自己犠牲の論理と心理を明らかにする。ここにおいて特に参照されるのが、共同行為としての人間の道徳的行為のあり方である。

第 部は、西洋近現代哲学と自己犠牲との関係を問う。デカルト以来の自己の概念を、発達心理学および言語哲学の知見によって捉え直し、自己利益の最大化を目指す功利主義的な道徳理論の内側で、自己犠牲的行為がどのように変貌するのかを確認する。以上の考察を通じて、私たちが現実に生きている世界と、西洋近現代の哲学が想定している世界が、どこで食い違い、どこで重なっているのか、読者みずからが考え直す契機を与えることを本書は目指している。

以上のとおり、本書は、本研究課題にあるとおり、自己犠牲という共同行為を虚構論的・演技論的に分析し、義務の発生に関する考察を行なったものとなる。

本書の目的は、「自己犠牲」というこれまで哲学的に見過ごされてきた行為類型を取り上げて、西洋近代の道徳哲学の前提を問い直し、それを超越する社会哲学的な洞察を得ることである。第二次世界大戦後の日本人BC級戦犯は、多く、法廷における近代的な個人責任の認定を受け入れず、日本人全体の身代わりとなるという自己犠牲の思想によってみずからの生と死を意味づけた。この事実は、自己犠牲の概念が近代的個人の枠組みに収まらないことを示唆する。ところが、イエスの十字架上の死が全人類を罪から救う自己犠牲であるという教義は、まさに西洋精神史

の礎石である。西洋近代の道徳的思考は、個人主義思想と自己犠牲の教えとの間に、潜在的な分裂を内包している。西洋近代哲学を全地球的な視点から見直す際には、たんに非西洋を西洋に対置するのではなく、西洋近代それ自体に内在する問題を指摘する必要がある。個人主義と自己犠牲の不両立は、西洋近代哲学に内在する気づかれにくい問題であり、これを詳細に検討することが本書の意義である。日本人の西洋哲学研究者は、研究対象と文化的な背景を異にする。筆者がみずからの文化的背景を西洋近代の文化的背景と突き合わせて成立したのが本書であり、これが本書に独自の学術的価値を与えている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2件)

田村均、懷疑家フィロはなぜ宇宙的知性を認めたのか ヒューム哲学とキリスト教の関係について 『名古屋大学文学部研究論集 哲学』2017年 第63号 19-60頁 <http://hdl.handle.net/2237/25883>

田村均、事物と私たちの想像論的なかかわりについて ケンダル・ウォルトンの「想像活動のオブジェクト」の概念をめぐる 『名古屋大学哲学論集』2017年 第13号 1-21頁

<http://hdl.handle.net/2237/25877>

[学会発表](計 1件)

田村均、発表表題「ヒュームは何を破壊したのか?」、於学習院大学 日本イギリス哲学会第40回総会・研究大会、シンポジウム ( )イギリス経験論とは何なのか 「ロック、パークリ、ヒューム」の系譜、第3報告、2016年3月29日。

[図書](計 1件)

ケンダル・ウォルトン『フィクションとは何か ごっこ遊びと芸術』田村均訳、名古屋大学出版会、2016、443頁+頁。

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等 無し

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

田村 均 (TAMURA, Hitoshi) 名古屋大学大  
学院人文学研究科・教授

研究者番号：40188438